

四 次の俳句は、擬態語を使ったインパクトの強い俳句です。感動を擬態語で表現してみましょう。1の「ふるさとの」を変えて擬態語を使い、2の俳句を完成させましょう。

1 鳥渡るふるさとの山美しく

大高 翔

2 鳥渡る山の と美しく

大高 翔

(ヒント 渡り鳥が飛ぶ空、山も退屈そうな様子。よくある平和な風景を擬態語にたとえた。)



五 次の俳句は、現立ての句です。俳句の中心となる事物をほかのものと仮にみなして表現する方法を「見立て」といいます。見立てには、直喩と暗喩の二種類があります。

紅葉を赤ん坊の手のひらにたとえたり、肌を餅にたとえたりと、ありきたりの表現にならないよう、想像力豊かに詠んでみましょう。

・ をもひとつ作るかき氷

大高 翔

(ヒント ひとつしかないはずのものを「もひとつ作る」という表現で意外性を感じさせる。)



六 最後に外来語を含む固有名詞を使って、多様なイメージをもつ俳句を作りましょう。

・ 秋天に という背骨

大高 翔

(ヒント 都会の建物である。構造を比喩で表現している。固有名詞)

(参考文献『ゼロから始める俳句入門』大高 翔 著 KADOKAWA)

七 大高 翔 の 俳 句



体育館わたしのひとつが終わった夏
春スキーさしだす君の手が欲しい
ふくらんだかばん明日は始業式
おはようの声がゆきかう更衣
新学期となりの席の恋敵

『ひとりの聖域』大高 翔著 邑書林

すぐそばに明け方のおい夏休み
捨てられるだけ捨てていこう春休み
十九歳秋空に名を刻みまし

『十七文字の孤独』大高 翔著 角川書店



八 【もっと知りたい人へ】

参考文献

『夢追い俳句紀行』大高 翔 著

『漱石さんの俳句』日本放送出版協会

『凜の世界』上杉満生・大高翔 求龍堂

『凜の世界』上杉満生・大高翔 求龍堂

大高 翔 ホームページ

<http://www.shootaka.jp>

九 大高 翔 (おおたか・しょう) プロフィール

俳人。一九七七年生まれ。一三歳より作句。執筆や校歌作詞など幅広く活動している。ライフワークとして、子どもたちや初心者への作句指導を行っている。また、海外でも日本語や日本文化の魅力を伝える活動を展開している。

二〇〇九年徳島県立徳島科学技術高等学校、二〇一二年徳島県立鳴門渦潮高等学校の校歌を作詞する。二〇一三年より徳島県阿南市の「阿南ふるさと大使」となる。

【解答と解説】

1 折り紙のピアノかたむく花の屋
折り紙のピアノかたむく花ぐもり

・春の華やぎを表す季語「花の昼」では表現できなかった憂いを句に帯びさせるため。

2 夏なつの海うみひとりでゆけるところまで

夏怒濤なつどひとりでゆけるところまで

・季語「夏なつの海うみ」がもつイメージは、海水浴、沖合の海の色と雲が織りなすコントラスト。中七以降の勢いある表現にそぐわない。中七の勢いを引き立たせる季語に変更する「怒濤なつど」の意味（はげしくあれくるう大波）

二 日傘ひがささす光ひかりと影かげをしたがへて

・強い太陽光の下では、「日傘」の白はよりまぶしく、影は深まる。強調される「光」と「影」によって、白と黒のコントラストが浮かび上がる。

三 春眠はるねや自由の城じゆうのしろに立てこもる

・季語は漢詩にもある「春眠」。心地よい眠りの状態を示す季語。「春眠」の意味や響きの柔らかさに、「城しろに立てこもる」という固い表現を対比させている。

四 鳥渡とりわたる山やまのぼかんぼかんと美しく

・渡り鳥が飛ぶ空、山も退屈そうな様子。よくある平和な風景を「ぼかん」という擬態語にたとえた。「ぼかん」という表現は本来間抜けな雰囲気をもつ言葉である。この擬態語を風景の美しさを表す言葉として用いたことで、意外性を感じさせる。

五 富士山ふじさんをもひとつ作るかき氷

・ひとつしかないはずの「富士山」を「もひとつ作る」という表現で、意外性を感じさせる。「かき氷」の美しい形を、富士山になぞらえた句。

六 秋天しゅうてんに東京タワーとうきょうたわーという背骨

・季語は「秋天」。澄んで高く見える秋の空に向かってそびえる東京タワーの姿を背骨としてとらえた。外来語を含み、固有名詞である「東京タワー」に、「秋天」「背骨」という硬質な言葉を並べて対比させた。

七【学習指導例1】

- ① 七の「大高 翔の俳句」から、ベスト1ないしはベスト3を選ぼう。
- ② その理由を、俳句の言葉を根拠として書こう。
- ③ 書いたことをもとに、意見の交流をする。
- ④ 選んだ俳句の鑑賞文を書く。

【学習指導例2】

- ① 一枚の写真（校舎内外の写真や学校行事の写真、光村図書教科書「単元の扉」の季節写真）を見て、一〜六の表現技法を使って、俳句を作る。
- ② 班で、句会を開く。

【参考文献】

『子ども俳句塾』 大高 翔 著 明治書院